

日本語における複合動詞の後項動詞 “あがる・あげる”について

—ポーランド語データとの対照研究から—

大 島 一

0. はじめに

本稿¹⁾では日本語の複合動詞における後項動詞「あがる・あげる」を取り上げる。姫野 (1999)では「あがる」を使った複合動詞は「あみあがる」「かけあがる」「しあがる」「せめあがる」「はいあがる」など 83 語あり、「あげる」では 152 語あると報告されている (サ変動詞はのぞく)。このような高い造語力をもつ「あがる」「あげる」の中核的意味をもとに先行研究では取り上げられてない現象に注目しながら分析する。

また具体的調査として、筆者が従事した日本語教育の現場でこの「あがる・あげる」について現場の日本語学習者がどの程度理解しているかを調べてみた。その調査結果と日本語学習者の母語との比較を元にし、「あがる・あげる」について考察する。

1. 複合動詞についての概観

本考察における複合動詞とは自立語としての動詞二つが結合した形態を指す。これを以下では“V1+V2”と表わすことにし、V1を前項動詞、V2を後項動詞と呼ぶことにする。結合の際、前項動詞には二つの形が存在する。一つは“動詞連用形”であり、もう一つは“動詞-テ形”である (姫野, 2001)。本稿では前者の前項動詞が動詞連用形の形をとるものを考察対象とする。

2. 「あがる」「あげる」の基本的用法

【あがる】

- (1) 椅子から立ちあがる¹²⁾
- (2) 荷台に這いあがる
- (3) 飛行機が飛びあがる
- (4) パンが焼きあがる

【あげる】

- (5) 月を見あげる
- (6) ボールを高く蹴りあげる
- (7) 名前を読みあげる
- (8) 論文を仕あげる
- (9) お金を数えあげる

「あがる」がついた結果生まれる複合動詞は自動詞、「あげる」では他動詞となるようである¹³⁾。意味的には前項動詞の動作内容を上方向へ移行するものとして捉える働きをもっているようである。つまり「立ち上がる」なら「上方向へ立つ」であり、「見上げる」なら「上方向へ見る」ということが分かる。よって、後項動詞「あがる・あげる」は「(～を) V1する方向が上」という意味構造をもっていると説明できる。

3. 問題と疑問

複合動詞における先行研究では、姫野(1999)、『複合動詞の構造と意味用法』が詳しいが、ここでは、「あがる・あげる」についてはその意味記述のみで、挙げられた意味の関連性は言及されていない。

「あがる・あげる」の語彙的内容が上方向への移動ということだけで、形成される複合動詞の意味が総て説明できるわけではない。たとえば、上記例では(4)「パンが焼き上がる」や、(8)「論文を仕あげる」、また他にも「(パソコンが)組みあがる」「思い上がる」などは具体的な上方向移動を指しているとは考えられない¹⁴⁾。

また、名詞化の段階でしか使用できないものが存在する。

(10) a. 今日はまだ病みあがりですから、発表の出来は悪いです

b. ?先週からの風邪でやっと今日、病みあがった

(11) a. 彼、付属からの持ちあがりだよ

b. ?彼は付属から持ちあがった

さらに自動・他動のペアとされるものでどちらかが受容可能性が低いと思われるものもある。

(12) a. サンマが焼きあがる

b. ?サンマを焼きあげる

3.1 基本的意味から派生的意味, そしてアスペクトへ

「あがる・あげる」といった空間的意味を持つ語彙要素が動詞に接続し、派生動詞をうむケースは様々な言語で見られる。例えば、ハンガリー語の接動詞 (preverb, igekötő)⁶⁾ などは日本語の複合動詞の後項動詞と同様の機能を有していると考えられる。

これらはすべて動詞の意味内容を修飾するものとして規定することができるが、この機能が果てはアスペクトにまで発展する現象がハンガリー語においても見ることができる (詳しくは, Kiefer (1982), Kiefer (1992) などを参照)。察するに、動詞の方向を規定することはその動作内容を有限的なものにし (限界的), それが完了的意味をもたらすと考えることができる (Kiefer, 1982)。

ここで「あがる」「あげる」自体の意味を考えてみる。「あがる」は特に完了的意味に使用されることが多いが、これは「あがる」単独の語彙的意味から来るものと想定する。例えば、柴田 (編) (1976) 『ことばの意味 1』では「あがる」の特徴として完了的意味をもっていることを示している。

(13) アガルの特徴:

特徴 1: 到達点に焦点を合わせる (例, 「呼ばれて 2 階にあがった」, 「川を *あがる/のぼる」)

特徴 2: 始めの状態 (基点) を離れることを表す (例, 「大勢の前であがってしまった」)

特徴 3: 非連続的移行である。完了を示す (例, 「血圧があがった」 「雨があがった」)

特徴4：上への移動である。その結果、顕在化する（「火の手（土煙・悲鳴）があがる」）

（柴田（編），1976）

柴田（編）（1976）では「あがる」を「のぼる」と比較対照しており、「あがる」が到達に焦点を当てるのに対して「のぼる」はその経路に焦点をあてていると説明されている。

3.2 名詞化

名詞化の段階でしか使用できないものが存在する。

(14=(10)) a. 今日はまだ病みあがりですから、発表の出来は悪いです。

b. ?先週からの風邪でやっと今日、病みあがった。

(15=(11)) a. 彼、付属からの持ちあがりだよ。

b. ?彼は付属から持ちあがった

「病みあがる」「持ちあがる」は名詞化された形以外では使われることはないと思われる。

(14a)の「病みあがり」は形態的には「病む+あがる」からの名詞化であると見られるが、「病みあがり」の意味は、“病み終る”ということである。「あがる」と「おわる」は後項動詞として使われた場合、意味的に等価のものを表すことが多く（「しあがる」と「し終える」など）、この場合の「あがる」が持っている意味とは前項動詞の動作内容の終了・完成であると考えられる。もしこれを「病みあがる」に当てはめると“完全に病気になってしまう”のような意味内容を得ることになり、これは使用されている名詞化形態の「病みあがり」の意味とは矛盾する。よって「病みあがり」の形成は複合動詞からではなく、「病む」に完了・終止の意味として使われる「あがり」が付いた分析的な形式であると言える⁶⁾。

(15b)の「もちあがる」はこのような文脈でない限りは使用できる（「車はジャッキで持ちあがった」など）。(15a)における「もちあがり」は複合動詞の動作の名詞化というより、いわゆる属性名詞として用いられている。このように複合動詞として分析が難しい名詞化形態は抽象的な意味合いの為だけに使用されると考えられる。

ここで、前項動詞単独から複合動詞、そしてその名詞化形態への移行過程を動作の完成という観点から考えると以下ようになる。

(16) V1 (前項動詞単独) → V1+V2 (複合動詞) → [V1+V2]_n (複合動詞の名詞化)

例えば、上記の「しあがり」などは、「する」→「しあがる」→「しあがり」と完成の度合が強くなる。「もちあがり」においてはこの完成度合いがそもそも強い形でしか現れ得ないという事から、複合動詞の形式では出現しにくいと考えられる。

3.3 自動・他動ペア

自動・他動のペアとされるものでどちらかが受容可能性が低いと思われるものもある。

(17=(12)) a. サンマが焼きあがる (自動詞文)
b. ?サンマを焼きあげる (他動詞文)

(17b)をもし「サンマ百匹焼きあげる」とすれば、受容可能性が高まると思われる。また「*トーストを焼きあげる」は困難ということから、目的語の名詞の規模が小さい時、その結果、すぐ焼けてしまうような場合は「焼きあげる」を使うと受容可能性が低くなるのかもしれない。

そうなると目的語の素性に問題があることになる。ここで様々な目的語を「焼きあげる」に加えてみる。

(18) ?ステーキを焼きあげる / ?陶器を焼きあげる / ??トーストを焼きあげる / ??紙屑を焼きあげる / ??炭を焼きあげる / ??CDを焼きあげる / ??砂浜で体を焼きあげる / ??硫酸で顔を焼きあげる / *世話を焼きあげる / *手を焼きあげる

しかし、「こんがり」となどの程度副詞を付け加えれば、受認可能性がかなり高くなると思われる。

(19) トーストをこんがり焼きあげる / ステーキをこんがり焼きあげる

(18)におけるその他の例では目的語との意味関係から難しいが、「こんがり」とが必要であると仮定すると、「焼き上げる」は焼くという動作が対象となるものを完全に酸化状態にさせる意味を持っていると考えられる。よって、

「こんがりと焼く」ことを前提としていない、又は必要性がないものとは共起しないと予想できる。これは言い換えれば、「焼く」ことがいい意味で捉えられるものには「あげる」が付き「焼きあげる」が可能となるということになる。Lakoff & Johnson (1980)では上方向ということは「良い」というメタファーに繋がると説明されている。

(20) GOOD IS UP, BAD IS DOWN

<よいことは上, 悪いことは下>

Things are looking *up*.

「景気は上向きつつある」

(Lakoff & Johnson, 1980:22)

よって、(18)における「世話をやく」「手を焼く」などとは「あげる」は共起せず、「硫酸で顔を焼く」も目的がある特殊な場合はのぞいて不適格であると見なすことができる。

「サンマ百匹焼きあげる」は、サンマ個体における完全な焼き加減への言及ではなく、「百匹焼く」というイベントの完全性を問題にしているので(百匹焼かないと「焼きあげる」とは言えない)、文法性が高くなったのだと考えられる。

4. 非日本語話者に対する「あがる」「あげる」についての調査から

4.1 具体的調査

具体的な調査として、筆者が教えていたワルシャワ大学日本学科の学生15人に「あがる・あげる」を使った複合動詞の調査を実施した。対象者はポーランド語を母語とする日本語学習者達でこれまで半年以上の日本滞在経験がないものに限った。彼らの日本語能力のレベルはおおむね、日本語能力中級レベルに相当する。基本的な文法事項は既習済みであり、簡単な日本語会話や作文作成も可能のレベルである。

調査において採りあげた複合動詞は姫野(1999)の“3.4.「～あがる」と「～あげる」の対応関係”における“(2) 意味的対応”に挙げられたものである(姫野, 1999:53)。調査においては以下のように指定して答えてもらった。

○: 「意味が分かり例も挙げられる」

△：「意味は大体わかるが、例を挙げることはできない」

×：「意味がわからない」

「○」を書き込んだ者には例文も書いてもらった。それをまとめたのが以下の表であるが、「○1」とあるのは「○」と答えて書いてもらった例文が正しい使用法であったもの、「○2」はその例文が文法的に間違った使用法であったものである。

表：

複合動詞の意味 (姫野, 1999:53)		項目	○1	○2	△	×
上 昇	空間的上昇	駆けあがる	3	0	7	5
		打ちあげる	6	1	4	4
	序列の上昇	繰りあがる	0	0	7	8
		繰りあげる	0	0	6	9
	形の伸長	盛りあがる	1	0	6	8
		盛りあげる	2	0	5	8
	形の縮小	縮みあがる	0	0	4	11
		まくりあげる	0	0	2	13
量の減少による形の縮小	はげあがる	0	0	2	13	
	刈りあげる	4	0	9	2	
完 了	完成品を伴う作業活動の完了	織りあがる	3	3	4	5
		織りあげる	4	0	7	4
	行為の完了	調べあげる	4	2	5	4
	自然現象の完了	晴れあがる	8	0	6	1
強 調	震えあがる	0	4	7	4	
	縛りあげる	0	3	3	9	
社会的行為	下位者→上位者	申しあげる	3	0	9	3
	上位者→下位者	買いあげる	1	0	11	3
体内の上昇	こみあげる	0	1	5	9	
図々しさ	つけあがる	0	1	3	11	

4.2 考察

日本語学習者達によると複合動詞の習得はかなり難しいとの事で⁷⁾、答えの半分以上が△, ×であった。結果を見る限りでは、やはり「空間的上昇」の「駆けあがる」「打ちあげる」は他と比べるとまだ理解しやすいようである。また、「完了」での「織りあげる」「晴れあがる」などもよく理解していると言える。

興味深い誤用例として、「調べあげる」を「～にして差し上げる」という意味あい使った例があった(該当する「○2」の欄)。「強調」における「震えあがる」「縛りあげる」, 「体内の上昇」「凶々しさ」などは正答がゼロであった。

誤用例としては、「震えあがる」では「*地面が震えあがる」といった主体の間違ひが見られた。「縛りあげる」では「?くつひもを縛りあげて歩きやすくなった」という強調と完了的意味合いの混乱したような例も見られた。

上方向に関する「あがる」「あげる」の複合動詞にはそれほど問題なく理解できるようであるが、「あがる」「あげる」が完了の意味で使われるという認識が強い事も伺われる。

4.2 言語的背景から

ポーランド語では動詞の前に接頭辞を付加し、動作の方向性を表す表現が使われる。この接頭辞を動詞接頭辞と呼ぶ。上記調査の被験者達の一人のポーランド人に本考察の対象となっている「あがる・あげる」を使った複合動詞で本論“2.「あがる」「あげる」の基本的用法”で挙げた日本語例のいくつかをポーランド語で対訳してもらった。以下がその結果である⁸⁾。

(21=(1)) 椅子から立ちあがる

<u>w</u> -stanie	z	krzesł-a
Pref-立つ.Perf.3.sg	Prep (～から)	椅子-Gen

「椅子から立ちあがる」

(22=(3)) 飛行機が飛びあがる

samolot- <u>φ</u>	<u>w</u> -zbija	się w
飛行機-Nom	Pref-飛ぶ.Imperf.3.sg	Ref Prep (～の中へ)

powietrz-e

空中-Acc

「飛行機が飛びあがる」

(23=(4)) パンが焼きあがる

(za chwilę) chleb- ϕ będzie wy-pie-czony

もうすぐ パン-Nom be (未来) Pref-焼く-PP (受動態)

「(もうすぐ) パンが焼きあがる」

(24=(5)) 月を見あげる

patrz-y na księżyc- ϕ

見る.Imperf-3.sg Prep (～へ, に) 月-Acc

「月を見あげる」

(25=(6)) ボールを高く蹴りあげる

wy-kopie piłk-ę wysoko w

Pref-蹴る.Perf-3.sg ボール-Acc 高く Prep (～の中へ)

powietrz-e

空中-Acc

「ボールを高く蹴り上げる」

(26=(7)) 名前を読みあげる

wy-czyta- ϕ imię- ϕ

Pref-読む.Perf-3.sg 名前-Acc

「(彼は) 名前を読み上げる」

(27=(8)) 論文を仕あげる

na-pisze prac-ę

Pref-書く.Perf-3.sg 論文-Acc

「論文を仕上げる」

(28=(9)) お金を数えあげる

po-licz-y pieniądz-e

Pref-数える.Perf-3.sg お金-Acc.pl

「お金を数え上げる」

結果を見ると、日本語の「あがる・あげる」を使った複合動詞は以下の方法で言い換えられている：

- a) w- (～の中へ) を使った動詞接頭辞 (例文(21), (22))
- b) wy- (～から外へ) を使った動詞接頭辞 (例文(23), (25), (26))
- c) 前置詞 na (～へ, に) を使った表現 (例文(24))
- d) na- や po- といった完了相動詞を形成する表現 (例文(27), (28))

興味深い事にポーランド語の動詞接頭辞においては「～の上へ」という意味の動詞接頭辞が生産的に使用されない (ws(z)-「上へ」という動詞接頭辞があるが、今回の調査ではそれは見られなかった)⁹⁾。従って上記のように他の方向的意味を持った表現で代用していると思われる。

5. まとめ

本考察では日本語複合動詞の「あがる」「あげる」を使った例を先行研究では指摘されていなかった現象について考察してみた。名詞化や自動・他動ペアにおける問題は「あがる」「あげる」がもつ完了的意味や目的語の特性とイベントの完成性による事がわかった。また非日本語話者であるポーランド人日本語学習者に対する具体的調査では具体的な上方向移動や完了的意味で使われる例は理解しやすいが、抽象的な表現は困難であることが確認された。そして彼らの母語であるポーランド語との対応例からこの「あがる・あげる」を使った複合動詞の理解を考えるにあたり、断定はできないが、「～から上へ」という意味をもつ動詞接頭辞がポーランド語で生産的に使われていない事も学習の上で多少の困難を与えていると言えるかもしれない。

【略号一覧】

Acc	Accusative	対格	Pref	Prefix	動詞接頭辞
Gen	Genitive	生格	Prep	Preposition	前置詞
Imperf	Imperfective	不完了相	Ref	Reflective	再帰
Nom	Nominative	主格	3	3 rd person	3人称
Perf	Perfective	完了相	sg	singular	単数
PP	Past participle	過去分詞	pl	plural	複数

【付記】 具体的調査，ポーランド語例作成，チェックに協力してくれましたワルシャワ大学日文学科3年生達に感謝いたします。なお本文中の誤りは全て筆者の責任である。

参考文献

- Comrie, Bernard (1976). *Aspect*, Cambridge University Press.
- Bielec, Dana (1998). *Polish: An Essential Grammar*, Routledge.
- 姫野 昌子 (1999). 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房.
- 姫野 昌子 (2001). 「複合動詞の性質」『日本語学 2001.8. vol.20』 明治書院.
- Kiefer Ferenc (1982). *The aspectual system of Hungarian: Hungarian General Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam.
- Kiefer Ferenc (1992). *Aspect and conceptual structure: The progressive and the perfective in Hungarian*, in *Studia Grammatica*. 34.(89-110).
- Lakoff & Johnson (1980). *Metaphors We Live*, The University of Chicago Press.
- 柴田 武 (編) (1976). 『ことばの意味 1』 平凡社.
- Smith, Carlota S. (1997). *The Parameter of Aspect*, Kluwer.
- J. Soltész Katalin (1959). *Az ősi magyar igekötők (meg, el, ki, be, fel, le)*, Akadémiai kiadó, Budapest.
- 寺村 秀夫 (1982). 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版.

-
- (1) 本稿は2003年8月27日～31日にワルシャワ大学（於、ポーランド共和国）にて開催されたEASJ (European Association for Japanese Studies) での筆者の発表を元に加筆修正したものである。
- (2) 日本語例文において特に明記されていないものは筆者の作例によるものである。
- (3) 例外として、「先生はプリンを召しあがる」などの他動詞文があるが、このような尊敬語は本考察の対象外とする。
- (4) 寺村 (1982) ではこのような例は一語化した複合動詞とされ、「その動作をするのにかげられた努力の特別な強さとか、特別な完成、達成の感じとかを比喩的に表わす」と説明されている (寺村, 1982: 182)。
- (5) ハンガリー語の接動詞 (動詞接頭辞とも) は動詞の前に付く動詞派生要素である。統語条件により、動詞から離れて後置する事もある。従って、その位置づけは接頭辞のようでもあり、副詞のようでもある。統語論的にみれば副詞、意味論的に見れば動詞接頭辞である。接動詞の中で生産的に

使用されるのは方向の意味を持つものであり、日本語の「あがる」「あげる」に相当するような意味をもつ *fel-*「～から上へ」というものも存在する。*fel-áll*「立ちあがる」、*fel-száll*「飛び上がる」、*fel-néz*「見上げる」など。また完了的意味にも使用される頻度が高い接動詞である。*fel-várr*「縫い上げる」や、*fel-fegyverez*「武装する」、*fel-használ*「利用する（使い果たしてしまう）」など。ただし、完全なる完了化機能とは言い難い。派生された動詞には接動詞 *fel-* の語彙的意味「～から上へ」が感じられる（「縫い上げる」はもちろん、「武装する」も「利用する（使い果たす）」もある行動が“あがった”状態である事は容易に確認できる）。ハンガリー語の接動詞全般に関しては、Soltész (1959)が詳しい。

- (6) 「芸人あがり」「学生あがり」などのような接尾語としての「-あがり」であると考えられる。
- (7) 現場での経験から言うと、作文の作成では複合動詞を使った表現はまず使用されていなかった。作文で多く見られる表現は漢字熟語を使ったものであり、これは作成の際に使用する英和辞書に影響されるところがあると思われる。従って、複合動詞の学習はどうしても困難になってしまう。
- (8) グロスでは形態素をハイフン - で区切った。またマーカークの顕在しない語形のもつ情報はピリオド . に続けて表記する。複数の文法情報を同時に表すマーカークのグロスにもピリオドを用いる。
- (9) インフォーマントの意見によるとポーランド語で「上へ」という動詞接頭辞はあまり認識できないとの事であった。